

大学受験直前の冬だといふのに『百万ドルをとり返せ!』(永井淳訳、新潮文庫)を読んだら、テンポのよい展開と魅力的な登場人物に夢中になってしまった。陽気で軽妙な、頭脳勝負の「コンゲーム(詐欺)」小説の傑作だ。ジェフリー・アーチャー作品はほとんど読んでんだ。後にスキャンダルで世間を騒がせた著者だが、ストーリーは痛快絶妙だ。

私は大学を卒業すると銀行に勤務し、夫が勤務先から派遣されたオックスフォードと一緒に留学した。イギリス知識人の生活や大学の儀式などを実見している最中にもう一度原書を読み直し、面白さが倍增した。

大学院を修了し、マッキ

術書読の遅れ半歩



川本 裕子

ンゼーに勤務した。登場人物のステイヴンのようなハーバード出の切れ者と

イギリスからの刺激

も、詰めの甘いデイウィッドみたいな同僚とも仕事をした。一方で、ポーランド移民の立身出世の大富豪で詐欺も働くメトカーフさながらのアメリカ人と話す機会もあった気がする。

そして現在、大学院で金融について講義をし、英工

コノミスト誌を学生と毎週読んでいた。後で気づいたが、マッキンゼーもエコノミスト誌も文中に出てくる。私にとって「予言の書」だったのかもしれない。

いつもイギリスから知的刺激を受けてきた。批判精神は旺盛だが、ウィットに富むユーモアがなければ失

ユーモアとオープンな議論

格だ。フェアプレーの尊重が、自由でイノベティブな議論を生む。

グレーム・グリーンやマイケル・コルダのリズムのよい文章も好きだったし、マギー・スミスやヒュー・グラント出演の映画にはいつも目が行く。ドラマ「ダ

ウントン・アビー」は日本放映を待たず、ビデオを取り寄せて見てしまった。

世界の知性が読むと言われるエコノミスト誌だが、1988年に日本の女性の地位がとて低めという記事が出た。留学中の私が「日本の性別分業意識はあまりに強くてそれが克服される

必要がある」と手紙を書いたら、翌週の投稿欄に掲載された。

異なる立場からの意見を直ぐに議論の土俵にあげる懐の広さ、オープンさは衝撃だった。「イギリス史」(全3巻、大野真弓監訳、みすず書房)を書いた歴史

家トレヴェリアンがイギリス人気質として挙げたオープンな土壌を実感した。自分の意見をきちんと伝えるようになりたいと強く思ったのはそれ以来だ。

今回のEU離脱問題では、残留派も離脱派も同じ時期にオックスフォードで学んでいた面々が多い。洞察力と指導力に富む彼らでも庶民の気持ちを読

み間違えたのは、ゲーム好きが高じたからだろうか。大陸欧州との距離感歴史上常に微妙だが、成熟し、冷静なはずのイギリスだから、この難所を軽やかに乗り切ってほしいと願う。ユーモアたっぷりの知恵で。

(エコノミスト)